

氏 名	藤 田 勉 ふじ た つとむ
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	論 医 博 第 6 5 号
学位授与の日付	昭 和 37 年 12 月 18 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	老人歯病学知見補遺 養老院入所者の歯、口、顎の実態調査を中心に
論文調査委員	(主 査) 教 授 鈴 江 懷 教 授 美 濃 口 玄 教 授 岡 本 耕 造

論 文 内 容 の 要 旨

社会福祉施設に入所している60才以上の老人についてその歯、口、顎の疾病を統計学的に観察して、老化現象の実態を多角的に検討した。そして、調査の対象には60才代101名、70才代177名、80才代85名、90才代3名で、男126名、女240名、その合計は366名であった。

現存歯は被検者の70%が保有し、男が高率であった。現存歯の1人当りは8.52歯(男>女、左=右、上顎前歯、下顎小臼歯、上顎<下顎)で、部位別では下顎前歯が最も多く、上顎前歯、下顎小臼歯、上顎小臼歯、上顎大臼歯、下顎大臼歯の順位である。

健全歯の保有者率は男>女、左>右側、上顎<下顎であり、被検者1人当たり1.8歯、現存歯保有者1人当りは2.6歯で、男23%>女20%、左側>右側、上顎<下顎であった。

人工歯保有者は被検者ならびに欠損歯保有者の38%で、被検者1人当たり8.05歯(男5.83歯<女9.22歯)、欠損歯保有者1人当たり8.10歯(男5.91歯<女9.22歯)で、人工歯保有者は1人当たり21.2歯(男21.0歯<女21.3歯)で欠損歯を人工歯で回復した率をみると上顎前歯>下顎前歯>上顎小臼歯>下顎小臼歯>上顎大臼歯>下顎大臼歯であった。

現有歯保有者は89.62%(男84%、女93%)で、被検者1人当たり、16.57歯(男15.9歯<女17.1歯)、現有総歯数は被検総歯数の51.78%を占めていた。

欠損歯は被検者数に対して98.91%(男98.41%<女100.00%)で、被検者1人当たりの欠損歯数は23.48歯(男22.20歯<女24.11歯)で、左側<右側、上顎>下顎であった。

なお無歯顎者は被検者の29.5%(男27.8%<女30.4%)で、うち義歯装着経験者は23.5%、現用者19%、上顎無歯顎者19%、下顎無歯顎者4.4%であり、

咬耗歯保有者は被検者の66%(男>女、上顎>下顎)で、被検者1人当たり3.9歯、現存歯保有者1人当たり5.6歯、下顎前歯部がとくに高度であり、咬耗状態は平等なものが高率である。

齶蝕罹患歯は被検者の57%(男55.6%、女57.5%)を占め、現存歯数に対して81.6%(男77%、女84%)

で、上顎>下顎であった。被検者1人当たりでは、3.04歯(男3.2歯、女3.0歯)で、上顎<下顎、現存歯保有者1人当たり5.4歯(男5.7歯、女5.2歯)、上顎<下顎、程度別ではC₁が11.2%、C₂が10.7%、C₃が11.0%、C₄が67.0%であった。

歯槽膿漏症罹患者は被検者の59.8%(男65.9%>女56.7%)で、現存歯保有者は85.9%(男91.2%>女76.8%)、被検者1人当たり74.3歯(男5.5歯>女3.7歯)、現存歯保有者1人当たり6.2歯(男7.6歯>女5.5歯)で、歯槽膿漏症罹患患者数に対して1人当たり7.2歯(男8.3歯>女6.6歯)、現存歯に対する罹患歯率は50.6%(男55.9%、女57.7%)で、上顎<下顎、部位別では前歯部>小臼歯部>大臼歯部の順序である。

処置歯保有者数に対して12.0%(男7.9%<女14.2%)、現存歯保有者数では17.3%(男11.0%<女20.7%)、被検者1人当たり処置歯0.34歯(男0.21歯<女0.41歯)、現存歯保有者1人当たり0.49歯(男0.30歯<女0.60歯)、処置歯保有者1人当たり2.86歯(男2.70歯<女2.91歯)、上顎>下顎、状態別では金属冠85.7%、充填歯14.3%であった。

論文審査の結果の要旨

第2次世界大戦後における医学界の新しい動向の一つとして老人学(Gerontology)、老人医学または老人病学(Presbyiatrics)の抬頭がある。歯科医学方面においても老人歯学または老人歯病学(Gerodontics)なる学問の領域が開拓せられ、今日立派な一つの分科にまで育っている。またわが国では老人病学会の創立、老人病学講座の開設など、この方面の態勢が大いに進んでいる。

ところが、このような現象に対応すべき老人病学の基礎データを調べてみると、まだなんら完成されたものがないといってもいい過ぎではない現状である。ことに著者が本研究において試みているような老人歯学においては、その重要な基礎資料たるべき老人の歯、口、顎の保健の実態、すなわち、はたしてその老化現象の進行状態が各年齢層により、また性別などによってどうなっているかというようなことは、きわめて大切な本質的事項であるにもかかわらず、その正確な基礎文献は必ずしも十分とはいえない状態である。

そこで著者は養老院入所者60才以上のもの366名につき、歯、口、顎の実態調査を中心として各種の観察を試み、この方面の知見を補遺するところあらんとしたのである。その調査範囲としては施設における被検者の健康管理をはじめとし、現存歯、健全歯、欠損歯、人工歯などについて詳細なる検索をとげ、また無歯顎者につき、さらに現有歯、咬耗歯、齲蝕罹患歯、歯槽膿漏症罹患歯および処置歯などについて調査を行なったのである。そうして、その調査の結果、著者の研究の対象となった社会福祉施設入所者のごときにおいては、歯、口、顎が荒廃状態に放置されていることの一斑を知り、その対策として現在わが国の老人健康管理のうえから咀嚼機関の回復、復元が焦眉の急を要することを提案しているのである。

以上の研究は現在ようやくその黎明期にある老人病学、老人歯病学に重要な基礎資料を供与するものというべく、その意味において医学上大いに寄与するところのものと考えられ、したがって本論文は医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。